

〔撮壤集^下病疾〕喉痺^{コウヒ}

〔醫心方^五〕治喉痺方第七十

病源論云、喉痺者、喉裏腫塞、痺痛、水漿不得入也。風毒客於喉間、氣結蘊積而生熱、故喉腫塞而痺痛、亦令人壯熱而寒、七八日不治則死。

〔瘍科秘錄^八〕喉痺

喉痺ハ咽喉ノ癰ニテ、又喉癰ト云フ、痺ハ麻痺スルノ義ニ非ズ、中藏經ニ痺者閉也トアリテ、咽喉閉塞スルノ謂ナリ、焦氏筆乘ニ、已ニ喉閉ト見ヘタリ、又乳鴛風トモ名ク、兩傍ノ腫ル、ヲ雙乳鴛風ト爲シ、一邊ノ腫ル、ヲ單乳鴛風ト云、和蘭陀ノ說ニ、懸壅ノ左右ニ巴旦杏腺ト云フモノ有リ、喉痺ハ此ノ處ノ腫ル、ナリト謂ヘリ、咽喉ハ飲食ノ道、呼吸ノ門ニテ、至極ノ要地ナリ、故ニ早ク救ハザレバ危篤ニ至ルコトアリ、此病ハ刺縫^{ナイモノ}臨摹^{カキモノ}剖剮^{ホキ}等ニテ、極メテ肩ヲ使ヒ、強テ腕ヲ勞スルモノニ多シ、

〔看聞日記〕應永廿五年九月六日、禁裏^光○稱 俄喉痺御惱、以外云々、面々仰天、然而體御取直云々、

〔妙法寺記〕永正八年、此年正月、浮世ニ口痺流行、人民死コト無限、然間、彼口痺ノ鳥ヲ作り送ル、一日病デ頓死ス、

胸病

〔醫心方^六〕治胸痛方第一

病源論云、胸脇痛者、由膽^{都敢反}與肝及腎^{時忍反}之支脈虛、爲寒氣所乘故也、此三經之支脈、並脩行、胸脇耶氣乘於胸脇、故傷其經脈、耶氣之與正氣交擊、故令胸脇相引而急痛也、

〔落窪物語^三〕北の方は、かの典藥の事により、起まして部屋の戸引き開けて見たまふに、うつぶしふして、いみじく泣く、いといたしや、などかくはの給ふぞといへば、胸のいたく侍ればと息の下にいふ、あないとをし、物の積かとも典藥のぬしくすしなり、かいさぐらせ給へといふに、類なく